

ここでは、瀬戸内以外のまれな存在として、この塩田を考察した。結果として農業の兼業とうながりが深い事は予期されることである。

比較的有利な自然条件の上に、昔は交通不便が地方的塩田を可能にし、兼業が多く小規模な事が低生産力にもかかわらず塩田を存在させた。最近は大災害が強力な組合組織形成の原因となった。それにも増して強力な背景となったのは、住民の意欲であった。

工業には左来工業が多いが、それから発展して近代工業になったものもある。ガラ紡等は三河の棉花栽培と結びついて発達した農村工業である。ガラ紡のみならず当地の工場は農村内に分布し、農村の余剰労働力を吸収している。

#### (第七章 まとめ)

以上が本地区の一般的特色であるが、地域内では更に細く分類できる。そこで兼業の種類から地域区分を行った。大きく二つに分けると、純農村と工業又は漁業を兼業とする町村にわけ、その中は、作物又は漁業の種類を指標にして細分を行った。が、この際、字別の統計が得られなかった事は非常に残念である。

## 厚木市周辺の地理学的考察

青 藤 潔 子

調査地域である神奈川県厚木市は、東京の近郊にあって、都市化の波をいろんな面で感じさせる新興の都市である。

厚木市周辺の地域性をみるにあたり、自然環境として地形を、人文環境として都市化とその影響を2つの主要な観点として、市を構成する各分野を、厚木市誕生後約10年間の変化という形で調査を始めた。都市化を考察する際に、都市化の実態を都市的土地利用の進出という形で、又都市化の影響として、人口構成の変化と、農村的機能要素の後退又は変貌という形でとり扱った。最後に、自然条件、都市化の性格のちがい、農業経営の特徴をもとにして、厚木市域の概括的な地域区分を行なった。

厚木市周辺は東の相模原台地、西の丹沢山地にはさまれた地域で、その間を、南下する相模川の中流部付近に位置する、地域の西縁は、雁行状の断片が、NNWへSSEの方向に配列し、又断層起源と考えられる数河川によって、いくつかの丘陵、台地に、ブロック状に分離されており、広く関東ロームにおおわれている。地形区分する際の手がかりとして、2.5万の地形図、

空中写真、ローム層の性質、及びローム層下部の礫の有無などに関する現地調査と文献による考察などによって、8つの地形面に区分し、中で、ローム堆積の有無により、丘陵を2面に、又表層ロームの遣いと比高によって台地を3面に分けた。

この地域の関東ロームの特徴としては、武蔵野ロームに一般的にみられる東京パミス層が、ここでは全くみられず、一方、この地域の武蔵野ローム層の最上部近くに、相模野ラピリと呼ばれる火山礫をはさむことがあげられる。

次に、土地利用についてみると、昭和34,5年を境にして、かなりの変化がみられる。厚木市の都市化は、工場、住宅の進出が急激になり始めた昭和35年頃から著しくなり、土地利用もかなり変化がみられる。都市的な土地利用の進出は、土地の取得の容易さと、道路網の発展により、沖積地よりも市の中心から概して遠方に位置する台地上に於て著しい。従って、それまでの、台地上の畑、沖積地での水田という明白な農業土地利用がしだいにくずれ、台地上で、都市的土地利用への転換がおこっている。又各台地によっても、都市化の度合は異なっている。市街地は、沖積地にのびて発展していくが、大規模な都市化は沖積地をとびこえた台地、丘陵地に向けられる傾向がある。

都市化はこうした土地利用への直接的なあらわれの他に、厚木市の農業内部に、かなりの影響を与えている。厚木市は、昭和39年現在農家戸数率42%で、神奈川県の中ではいうまでもなく、全国的にも農業的要素の強い市であるといえる。しかし、厚木市内部に目を向けると、農業戸数率、専業農家率の低下は著しく、その度合は、全国平均を上回っている。又農業経営も耕地の減少、非農家の増加に伴なって、園芸、畜産を中心とする集約化の傾向がみられる。園芸はかなり条件のよい広い水田をもった市近郊の専業農家層に多く、又畜産は耕地も、労働力も園芸より少なくすむので、兼業農家の主要な農業収入源となっている。しかし、畜産はまだ副業的畜産の域を脱していない。

以上のような地形の相違、都市化の地域差、農業の性格のちがいなどによって、(1)市街地近接地域、(2)厚木近郊地域、(3)局地的都市化、畑作地域、(4)相模川、玉川、水田地域、(5)厚木山間地域 の5つに地域区分を行なった。